

令和三年二月四日

新型コロナウイルス感染防止のため「メール句会」「オンライン句評会」を実施。
兼題『春めく』『通』

宮原 ユリ

冬ざれや土に還らぬ物いくつ
冬寒し接ぎ穂を持たぬ独り言
咳込みし後のしじまや雨の音
バリウムの喉を通れる寒さかな
春めきて信号待ちのストレッチ

首藤 しずを

大寒の山気震はず斧の音
立春の光つめたき弥勒仏
金縷梅まんざくの蕾をほどく通り雨
出番よと黄花ぼつぽつ春隣
春めける池の鮒つ子ひよこり出づ

新田 ゆふき

春めくや濃厚接触池の鴨
春めくやシーサーの口あんぐりと
春の雪通る人ごと綿帽子
一步前へ吾を引く力春兆す
春立つ日橋を行き来つ住まいける

大津 そうかい

助手席に子の笑顔ある初荷かな
春近し撫で牛に手を置いてみる
吊し柿光と風と星の味
通信使過ぎし瀬戸内蜜柑山
春めくや娘着し服孫の着て

長尾 進一郎

春めくや朝の囁りト長調
春風と並びて通る商店街
水温む目覚めし魚の泥立てり
河川敷の彼方溶け込む春霞
空広し剪定終へし母の庭

高橋 由紀子

コンビニの和菓子わがしの棚も春めきめ
通販誌めぐる母娘の背に春日
鳥の群広がり縮み雲に入る
朝霞天空に浮くビルの窓
水鳥の競ひ飛び上ぐ堰の段

中村 晃也

凍て星に見守られぬ通過駅
紅梅の蕾膨らむ通学路
散り急ぐ山茶花雨のガラス窓
春めいて煙雨の街にジャズ流れ
春めいて土黒々と目覚めけり

志村 良知

大寒や恙なしとのエアメール
遠霞日の通い路は日々近し
ガラス越しの想ひ通ふや猫の恋
通ふ風に尋ぬる梅の在り処
白々と丹沢おわし春立ちぬ

森田 元斐

春めくやジャズの伴する万葉集
池の端の定め場所に野芹萌ゆ
天神へ通ふ日重ね梅の花
川上へ天翔ける鷺風光る
ほろ苦きうどと語らふ旅の酒

安藤 晃二

急を告ぐかにぼた雪の石に消え
春めくや男体山おんたい遥か畔歩く
大通り御苑の森に春日入る
山茶花の一輪消えし今日の窓
ドライなるあざさゐの映ゆ冬日和

斉藤 まさお

春めくや手づくりのパン焼きあがり
春めくと鍬打ち下ろす大地かな
冬ざれや舗装はがされ土見えて
春の日や遠き歌声通りゃんせ
成るがままゆだねて生きる冬銀河

内藤 まりこ

冬夕やけ櫂の枝を赤く染め

春めく日角を曲がれば好きな徑

日向ほこ通れる猫に手を伸ばし

冬入日グレーとベージュと赤の空

ツチノコに似たる庭石梅花着る

今回は、令和三年三月四日（木）です。兼題は、

宮原ユリさん出題の『春一番』、並びに知世先生
出題の『果』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

二月の兼題は「春一番」

最近は気象用語として有名。歳時記には傍題に
二番三番…も見受けられる。立春後、最初に吹く
強い南風のこと、二月末ごろ一番が吹いて、木
の芽がほころぶ。二番は桜の咲く前に吹くそう。

この風による海難を畏れる漁業関係者の用語だ
ったが、春風の中でも春の訪れをもっとも感じる
風として俳人の好む季語となった。長い冬を通り
抜け、弾き出されるように動き出した春の力強さ
が籠っている季語である。

春一番武蔵野の池波あげて

水原秋櫻子

春一や列島藻塩まぶれとす

阿波野青畝

春一番狂へりわが胃また狂ふ

相馬遷子

春一番深入りしたる晩年よ

殿村菟絲子

春一番見かけ倒しも芸のうち

佐藤鬼房

春一番二番ふところ火の車

小出秋光

胸ぐらに母受けとむる春一番

岸田稚魚

春一番柁ぐらりとかつぎ出す

宮下翠舟

春一番貝殻館の貝ざわめく

きくちつねこ

風呂敷で運ぶ地球儀春一番

池田澄子

理髪店から男出て春一番

青山丈

春一番競馬新聞空を行く

水原春郎

春一番靴の軽き日なりけり

蘭草慶子

山峡に星を片寄せ春一番

戸恒東人

ヘルメット脱ぎ女なり春一番

三田洋子